

江戸新選三十三観音霊場、伝馬町、人形町、両国、大横川、業平をめぐる。



南千住回向院、江戸三刑場の小塚原(区指定)、南大井の鈴ヶ森(都指定)、大和田(都下八王子大和田橋北詰)

- 右側の腕の形をした墓石は「腕の喜三郎」と言う侠客の墓、歌舞伎の演目にもなりました。
- 隣は「高橋お傳」の墓です。毒婦として巷間流布されているが実は健気な優しい殺人犯、今なら執行猶予。
- 左端の源達信士は「鼠小僧治郎吉」の墓、武家屋敷から金を盗み、貧民にばらまいたという義賊。

江戸庶民に慕われた盗人と云われています。 <開門前のため拝観無>

[→写真] 吉田松陰の墓に「松陰二十一回猛士」と記されています。本資料の詳細説明をご参照ください。

小名木川、川施餓鬼「灯籠流し」

小名木川萬年橋、7/26(火)19:00 開催

最寄り駅：半蔵門線清澄白川駅

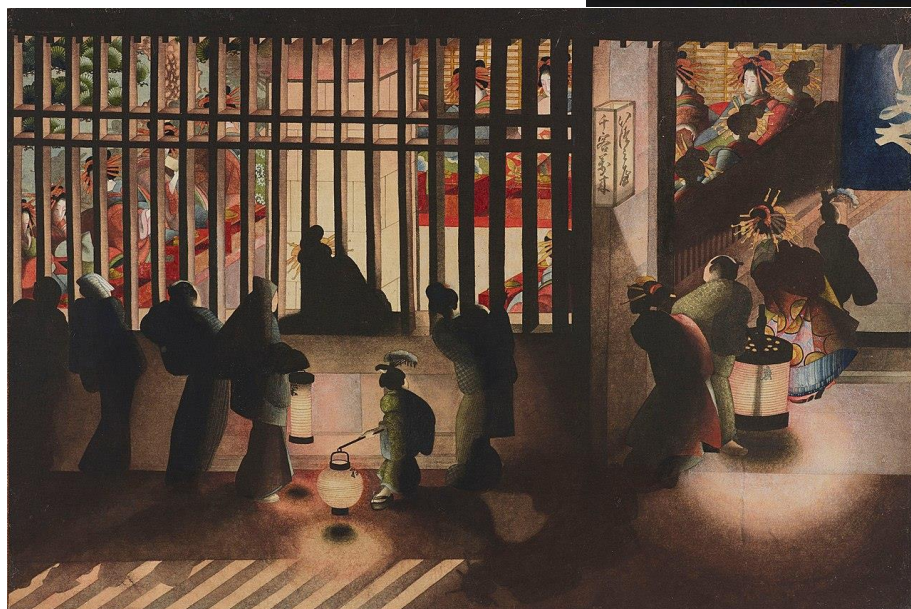
主催： 深川仏教界

施餓鬼には海、川、馬、火山、自然界を対象とした川施餓鬼があります。

河川反乱や洪水等での「水難による死者の霊を弔う法要」をいいます、

灯籠を流して静かに行う儀式です。

他に、筏上で爆竹で賑やかな精霊流しもある。



浮世絵師葛飾北斎の娘応為の作品

吉原格子先之図 陰による立体感を浮世絵に取入れている。

北斎は、三女の応為(お-い)をお栄(おえい)と呼んでいた。

お栄は父北斎の終焉を見届け、絵師を生涯続けました。

北斎作といわれる春画の多くは応為が描き稼ぎ頭でした。



旧両国国技館と回向院本殿



国技館は後に日大講堂となり、テレビ放映開始とともにプロレスラー力道山により世界に知られる様になる。

寛永6年(1629)頃の古隅田川(青色線)地図、向島高速入口～十間橋間が武蔵と下総の国境という。



江戸名所百景「小梅堤」安藤広重

現曳舟川通りである川を縄で引く小舟、サッパコがあったそうです。

川の右側にスカイツリーという位置です  
小梅橋(業平橋川上方)から向島方を望む

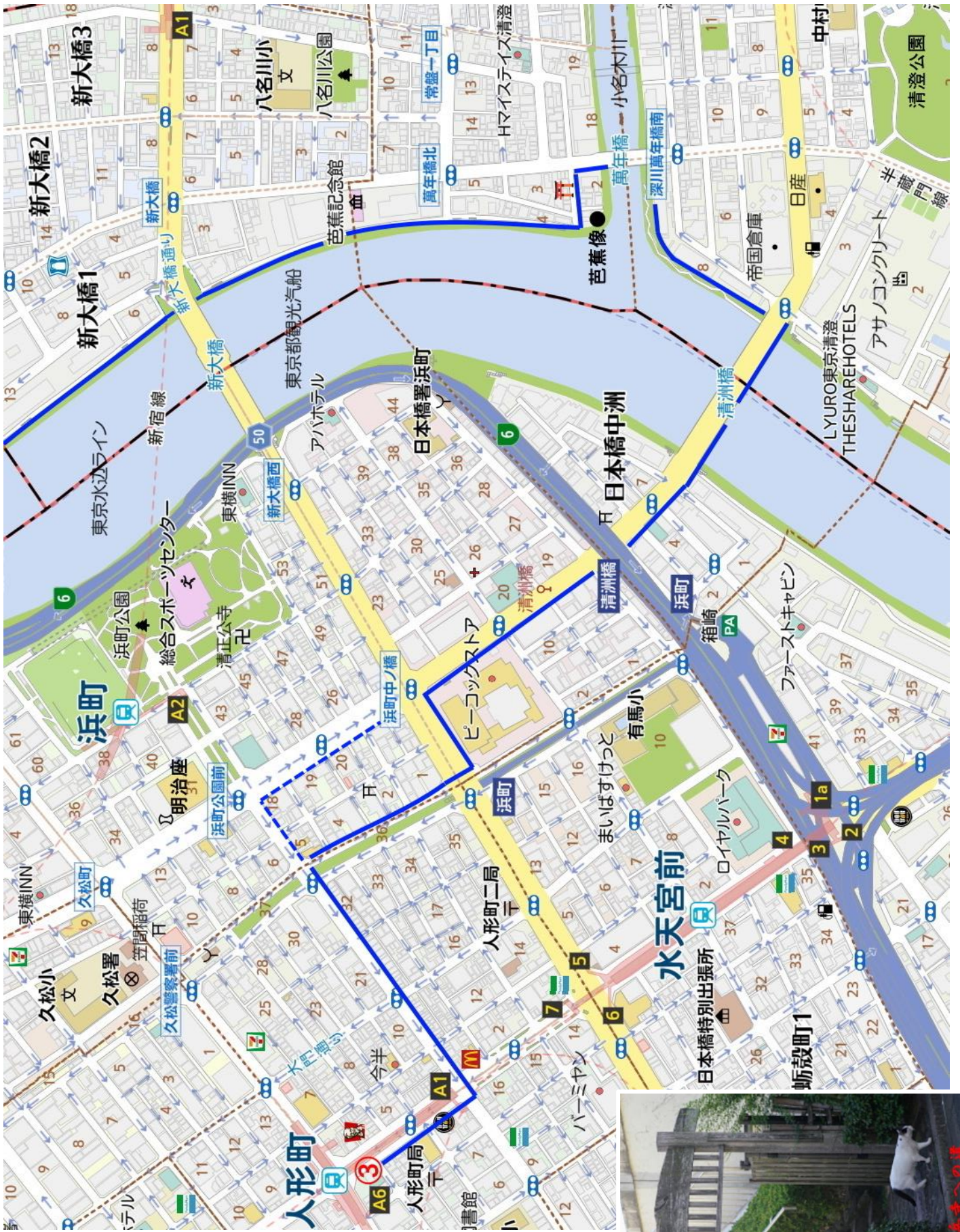






- ※ 北斎美術館
- すみだ北斎美術館  
葛飾北斎生誕の地  
津軽家上屋敷跡  
野見宿福神社  
西側道向かい側は  
1 江川太郎左衛門屋敷跡  
北斎通り向かい側は  
2 八角部屋  
3 錦戸部屋  
4 岡内重俊旧居跡地  
5 あられ本舗  
6 三遊亭圓朝旧居跡  
阿竹黙阿弥終霊の地





次回の予定(案内、旧東海道品川宿の観音霊場参拝、品川駅解散  
 8月20日(日)8時40分品川駅京浜急行JR直結改札口券売機横  
 京浜急行立会川駅から品川駅迄6首を巡拝します。  
 35℃以上の猛暑予報等で中止の場合は翌週へ延期します。  
 連絡先： 0297-73-3906 熊倉





# 昭和新撰江戸三十三観音霊場巡拝

南千住駅集合、人形町、小名木川、両国

北斎通り、大横川、旧業平駅7.5km

松尾芭蕉、小林一茶、長谷川平蔵の地巡り。

昭和新撰 江戸三十三観音札所(江戸33観音)とは、東京都内にある33箇所の観音霊場札所を言います。

## 御宝号 南無大慈大悲観世音菩薩

南千住駅前の小塚原回向院(こづかはらえこういん)

豊国山(ほうこくさん)回向院、浄土宗、荒川区(未)

ご本尊… 阿弥陀如来、創建年… 寛文七年(1667)

〔常磐線南千住駅線路脇にある寺で、過去は両国回向院の別院でした。〕

慶安四年(1649)に新設された小塚原(こづかはら)こづかはら刑場での刑死者を供養するため、寛文七年(1667)に本所回向院の住職弟誉義観(ていよぎかん)が常行堂を創建したことに始まります。

この寺には、安政の大獄により刑死した橋本左内、吉田松陰、頼三樹三郎等、また「毒婦」と云われた高橋お伝などの歴史上の有名人物が葬られている。

明和八年(1771)に蘭学者杉田玄白、中川淳庵、前野良沢らが刑死者の腑分け(ふわけ)現在の解剖に立ち合ったことを記念した、大正11年(1922)建立の観臓記念碑があります。解剖学の「解体新書」です。

また戦後の代表的な誘拐事件の通称「吉展ちゃん事件」の犠牲者村越吉展当時4歳の供養のために建立された「吉展地藏尊」が寺の入り口にあり、境内へは、建物1階にある寺務所の脇を通り抜け

ると墓所があります。向かって左手が一般の墓所で、右手が史跡と完全に分けられています。荒川区指定記念物 史跡という掲示がされていますので間違えることはないでしょうが、一般の墓所に足を向けないように気をつけてください。

この寺は常磐線沿線にあり、鉄道敷設の際に南北に分断されました。その後分断された南側部分が独立して延命寺となっています。延命寺には刑死者などの無縁仏を供養するための首切地藏が安置されています。TX開通時に人骨が大量出土で騒がれた。

現在、「小塚原刑場跡」として荒川区指定記念物に指定され、史跡と謳われています。

## 吉田松陰の墓

小塚原回向院は、安政の大獄で刑死した吉田松陰が最初に埋葬された処です。文久三年(1863)に高杉晋作らの手によって松陰の遺体は掘り出され、世田谷区の松陰神社に改葬されますが、高杉らは『聖なる血が残っている』と以前の墓地を修復し、祈りを捧げられる場所として元墓を残しました。

正式な名は、吉田寅次郎藤原矩方、

天保元年(1830)〜安政6年(1859)

長州藩士、号は松陰。年少より大義を唱え、松下村塾を主宰、明治維新の原動力となる有為の青年を多数輩出しました。安政の大獄により刑死。

小塚原回向院より改葬。享年三十。

## 世田谷の松陰神社

吉田松陰の写し墓碑をはじめ、頼三樹三郎、小林民部、来原良蔵、福原乙之進、綿貫次郎輔、中谷正亮、其の他烈士の墓碑があります。

文久三年(1863)正月。高杉晋作、伊藤博文、山尾庸三、白井小助、赤根武人等は、千住小塚原回向院より世田谷若林大夫山の楓の木の下に改葬しました。禁門の変の後、長州征伐の際に幕府によって松陰先生以下の墓は破壊されましたが、明治元年(1868)、木戸孝允等の手により破壊された墓石を修復しています。

## 墓石の松陰二十一回猛士とは

吉田松陰は句を詠むとき、「二十一回猛士」という号をよく使っていました。使われたのは、松陰が25歳位の時からです。

獄中の松陰は、夢の中でお札を持つ神が松陰にそのお札を差し出します。そこに描かれていたのは、二十一回猛士という言葉でした。

松陰は、この言葉の意味について、松陰の旧姓は「杉」で、この字を分解すると十と八と三、足すと「二十一」となります。また性である「吉田」を分解すると、吉が十と一口、田が十と口で、数字だけを足すとまたも「二十一」となり、さらにふたつの口を合わせると「回」になります。つまり吉田を分解すると、「二十一回」になります。

松陰は、二十一という数字は自分に与えられた数字なのだ解釈しました。

「猛士」についても、自身の通称である「寅次郎」から来ていること、寅は虎とも読むことができ、その虎の特性は「猛きこと」で、夢は虎のごとく「猛きこと」を二十一回行いなさいという神からの啓示であり、人生においてなすべきことなんだと悟ります。このときすでに松陰には、これまで三度の「猛

きこと」を行ったという自覚があり、それは、二度に及ぶ海外渡航の失敗と長州藩への訴状却下等、残りの十八回の「猛きこと」は出獄してから行おうと心に誓いますが、獄中処刑で成し遂げられていません。さぞ、無念であったことでしょう。

松陰神社は、世田谷観音参拝時に、三軒茶屋駅で下車した時に旧玉電の世田谷線を案内予定です。玉電には乗りませんが豪徳寺等見所一杯です。

## 日比谷線南千住駅乗車→小伝馬町駅下車

### 第5番 新高野山大安楽寺、小伝馬町

高野山真言宗、ご本尊 弘法大師

札所本尊 十一面観世音菩薩

ご詠歌 あなとうとみちびきたまへかんぜおん

はなのうてなの安らぎの寺

ご真言 おん まか きやろにきや そわか

かつては一帯が伝馬町牢屋敷であり、当寺にも「江戸伝馬町処刑場跡」の碑が残っています。

牢屋敷は明治八年(1875)五月に市ヶ谷の市谷監獄へと移ったものの、跡地は処刑場跡であることが嫌われ、荒れ果てたままでした。

遡って明治五年(1872)、この地に燐火が燃えるのを見た五大山不動院の住職であった大僧正の山科俊海は処刑場で亡くなった者たちを慰霊せんと勸進し、明治八年に大倉喜八郎、安田善次郎等の寄進を受け創建されたのが大安楽寺でした。

明治16年(1883)には高野山より弘法大師の像を遷座し、新高野山の山号を称しました。

しかし、大正12年(1923)の関東大震災による火災で堂宇は焼失。昭和4年(1929)に現在の規模で再建されたといえます。

昭和29年(1954)、都の史蹟指定をうけました。

### 十思公園は江戸伝馬町処刑場跡

大安楽寺一帯は、江戸時代の伝馬町牢屋敷処刑場跡として都史跡に指定されており、境内に「江戸伝馬町処刑場跡」と「吉田松陰終焉の地」の石碑が立っています。

牢屋敷の責任者である、囚獄(しゅうご)の牢屋奉行は大番衆の石出帯刀(いしでたて)でたてわきは、代々世襲でした。その配下として40人〜80人程度の牢屋役人、獄丁50人程度で管理をしていました。

囚人を収容する牢獄は東牢と西牢に分かれていて、身分によって収容される牢獄が異なり、大牢と二間牢は庶民、揚屋は見参(けんさん)、江戸時代は御目見(おめみ)以下の幕臣や御家人、大名の家臣、僧侶、医師、山伏が収容されていました。

また独立の牢獄として揚屋敷が天和三年(1683)に設けられ、御目見以上の幕臣の旗本、身分の高い僧侶、神主等が収容されました。

身分の高い者を収容していたため、ほかの牢より設備は良かったようです。

大牢と二間牢には庶民が一括して収容されていましたが、犯罪傾向が進んでいることが多かった無宿者が人別帳に記載されている有宿者に悪影響を与えるのを避けるため、宝暦五年(1765)に東牢には有宿者を、西牢には無宿者を収容するようになりました。

また、安永五年(1786)には独立して百姓牢が設けられました。女囚は身分の区別なく西の揚屋の女牢に収容されていた様でした。

収容者の総数は大体三百から四百人程度だったようです。明治8年(1875)市ヶ谷へ移るまで使用されていました。高野長英や吉田松陰は刑死ですが、此処は、刑の施行はしません、刑務所でも死刑囚の措置的役割の処といえます。

十思公園隣の十思スクエア別館、小伝馬町牢屋敷展示館に立寄り予定です。03-3546-5346

### 第三番 人形町大観音寺、聖観音宗、

札所本尊 聖観世音菩薩、ご本尊 聖観世音菩薩

ご詠歌 くるがねのかたきちかひに み仏は

はなさくがごとちまたにぞたつ

ご真言 おん ありきや そわか

大観音寺は霊場一番浅草寺と同じ聖観音宗ですが、元々は天台宗で、昭和27年に改宗しています。

本尊の鉄造聖観世音菩薩は、そもそも鎌倉の新清水寺の本尊として奉安されていたものだという。

火災により新清水寺が消失するも、本尊は難を逃れ井戸の中に安置されていたものを、元禄12年(1699)鶴岡八幡宮近くの鉄の井(くろがねのい)より掘り返され、鉄観音堂を立てて尊崇しました。

大観音寺本堂鉄観音堂は鶴岡八幡宮の別当であったため、明治政府の神仏分離令による廃仏毀釈運動によって観音像は投棄されたが、人形町の住人が現在地に勧請したといわれています。

鉄造聖観音像は首だけの像だが、高さ170cmもあ

る大きなもので、都の有形文化財に指定されている。  
秘仏のため普段は拝観できませんが、毎月17日の縁日に開帳され拝観することができます。

本堂には聖観音菩薩と阿弥陀如来を祀っています。また、境内には馬頭観世音菩薩を祀る堂や韋駄天尊や本願地藏尊が祀られています。

清洲橋で隅田川を渡ります。池がある伝統の日本庭園で知られる「都立清澄公園」は300m程先です。

隅田川左岸を小名木川河口へ向かいます。

万年橋通り向かい側は清澄2丁目、北の湖部屋の他、尾車、高田川、大鵬横綱の大嶽部屋、鏝山等多くの相撲部屋が現在もあります。

### おなぎがわ 小名木川

小名木川は砂町の旧中川まで一直線に流れ、大島で荒川と中川へ合流する運河で人工河川です。

中川からは、新川にて行徳の旧江戸川へ、行徳で塩を船積みして江戸川を上り関宿から利根川を下り取手、香取、銚子へ人や食料等を運送していました。

1588年頃、江戸城を居城に定めた徳川家康は、兵糧としての塩の確保のため行徳塩田に目を付けた。

しかし行徳から、江戸湊である日比谷入江付近までの江戸湾北部は当時、砂州や浅瀬が広がり船がしばしば座礁するため、大きく沖合を迂回するしかなかった。さらに、沖合を迂回しても、風向きによっては湾内の強い風波を受け船が沈むことも起き、安全とは言えませんでした。

そこで小名木四郎兵衛、河川の名主に命じて、行

徳までの運河を開削させたのが始まりです。

江戸日本橋河岸に安全に塩や物資を運べるようになり、かつ経路が大幅に短縮されました。

さて、行きは荷物や人でいいけれど、帰りは空荷だったのでしょうか。とんでもないしつかり「うち」で稼げた様子です。

日本通運は大運送会社ですが、客船の通運丸の運行などを内国通運時代に行い、小名木川で大きくなった運送業者です。日本橋蛸殻(かきがら)町に明治四年に飛脚問屋の集結から発足したといわれています。

塩以外の品物の運搬や、成田参詣客なども運ぶようになつて、行き交う物量が増大し、1629年小名木川は江戸物流の重要河川と認識され、利根川東遷事業と併せて拡張され、小名木川と旧中川、新川の合流地点には「中川船番所」が置かれ、幕府の役人がそこに駐在し、行き交う船の積み荷に江戸の治安上危険な物などが紛れ込んでいないか確認するために簡易な検査を抜打ちで行っていました。

新川、江戸川、利根川を経由する航路が整備されると、近郊の農村で採れた野菜、東北地方の年貢米などが行き交う大航路となります。

開削とほぼ同時期に川の北側が深川八郎右衛門により開拓され深川村に、慶長年間に川の南側が埋め立てられ海辺新田となり、以降江戸時代を通じて埋め立てが進みます。

やがて小名木川を中心に堅川や大横川、横十間川、仙台堀川などの整備が進み、重要な運河の一つとして機能していました。

明治時代に入ると、小名木川沿岸一帯は諸工業が

盛んになり、工業地帯となります。

1930年荒川放水路完成。これに伴い荒川や旧中川、新川の合流地点に「小名木川閘門(こうもん、水位調整)」「小松川閘門」「船堀閘門」が設置されました。

昭和50年代には地盤沈下などにより閉鎖されたが、2005年に「荒川ロックゲート」が完成し、旧中川を経由して荒川への通行が可能になりました。

### 万年橋と川船番所跡

万年橋が架橋された年代は定かではないが延宝8年(1690)の江戸地図には「元番所のはし」として当所に橋の記載があります。

江戸時代初期、この橋のすぐ北側に小名木川を航行する船荷を取り締まるために「川船番所」が置かれていたものの、この番所は明暦の大火後の江戸市街地の整備拡大に伴い、寛文元年(1661)に中川口へと移されたため、近隣住人により「元番所」と呼ばれていたことに由来します。

慶賀名と考えられる「万年橋」という呼称となった時期などは不明です。

小名木川に架けられた橋はいずれも船の航行を妨げないよう橋脚を高くしていたが、万年橋は中でも特に大きく高く虹型に架けられていたことから、その優美な姿を愛された。葛飾北斎は富嶽三十六景の中で「深川万年橋下」として、歌川広重は名所江戸百景の中で「深川万年橋」として描いています。

又、元禄15年(1700)赤穂浪士による仇討後の吉良邸から泉岳寺帰還道であったため渡橋している。

河口右岸には、松尾芭蕉の像が立つ広場があり、松尾芭蕉が居を構えた場所で、隅田川と小名木川の

合流地点付近の住居跡は芭蕉歴史庭園として整備されています。また近隣に江東区芭蕉記念館がある。

### 芭蕉神社と赤穂浪士泉岳寺帰還の道

俳聖松尾芭蕉は、延宝8年(1690)に高弟杉山杉風、幕府御用魚問屋「鯉屋」より草庵の提供を受け、当地に居を移しました。

庵は当初「泊船堂」と称したが翌年春に門人李下(りか)が植えた一株の芭蕉がよく繁ったことにちなみ「芭蕉庵」と改称、自らの俳号もそれまでの「桃青(とうせい)」から芭蕉に改めました。

第一次芭蕉庵は天和の大火、八百屋お七の火事で焼失し、その後第二次庵がほぼ同じ場所に、第三次庵は旧庵の近辺に建てられました。

芭蕉は、元禄7年(1692)に大阪で病没するまで当地を本拠としており、貞享3年(1686)に第二次庵で名句「古池や蛙飛びこむ水の音」を詠んでいます。

没後、元禄10年(1695)に庵のあった一帯は信濃国飯山藩松平遠江守忠喬の下屋敷に取込まれました。

芭蕉庵は旧蹟として残されていたが、幕末から明治にかけて消失したといえます。

大正6年(1917)、台風の高潮が襲った後、現在地で芭蕉遺愛のものとみられる石蛙が発見され、地元の人々の尽力により、ここに石蛙を御神体として稲荷を祀り当社が創建されました。

大正10年11月、東京府は常盤1-3付近を芭蕉庵跡と推認、旧跡「芭蕉翁古池の跡」に指定、昭和20年、戦災で荒廃した松尾神社は、芭蕉遺跡保存会によって昭和30年再建されました。

赤穂浪士ゆかりの道、浅野家討入り後泉岳寺への帰

路の道だそうです。永代橋で隅田川を渡りました。

一之橋で堅川を渡り、隅田川を上流方へ進みます。

### 両国橋

両国橋の創架年は2説あり、万治二年(1659)と寛文元年(1661)です、千住大橋に続いて隅田川に2番目に架橋された橋。長さ九十四間(約200m)、幅四間(8m)。名称は当初「大橋」と名付けられていました。

しかしながら西側が武蔵国、東側が下総国と二つの国にまたがっていたことから、俗に両国橋と呼ばれ、元禄六年(1693)に新大橋が架橋されると正式名称となったようです。

位置は現在よりも下流側であったらしい。

江戸幕府は防備の面から隅田川への架橋は千住大橋以外認めてこなかった。しかし明暦三年(1657)の明暦の大火の際に、橋が無く逃げ場を失った多くの江戸市民が火勢にのまれ、十万人に及んだと伝えられるほどの死傷者を出してしまう。

事態を重く見た老中酒井忠勝らの提言により、防火と防災目的のために架橋を決断することになる。

架橋後は市街地が拡大された本所深川方面の発展に幹線道路として大きく寄与すると共に、火除地としての役割も担いました。

### 武蔵下総両国の境は両国橋ではなく十間川橋

隅田川左岸の首都高速6号線向島料金所から、隅田川は左方の押上方面に流れていた、現在は「鳩の街通り」と云われ、昭和まで遊郭街でした。

鳩の街通りは、国道6号の東向島交差点へ、直進して、曳舟川通りの高木神社入口交差点への狭い道

が古隅田川(請地古川)跡です、曳舟川は埋め立てられ現存しません。更に古隅田川は、現在の押上駅東側の請地村と押上の境を流れ、京成線請地駅と交差していた様です。請地は「向島」と一緒に、浅草や日本橋から見ると、浅瀬であり、引き潮のときには所々に島が浮かんで見え、その様子から「浮き地」と呼ばれたのが訛ったとのこと。

更に直進して、東武線と京成線のガードを通過し押上3丁目交差点を渡り、新あづま通り脇道を直進し「十間橋通り」で右折、北十間川の十間橋で合流します。橋を渡り、北十間川右岸の横十間川を下れば、堅川、錦糸町駅を経て小名木川に合流します。

両国橋の橋名の由来は、隅田川に掛かるために右岸の武蔵国と左岸の下総国で両国という橋名に成ったと言われていますが、以上の様に、実際の古隅田川の流れは東寄りであり、古隅田川の左岸が下総国であり、両国橋は元々武蔵国といえます。

利根川東遷事業終了により、貞享3年(1686)若しくは寛永年間(1622~1643)に太日川(現江戸川)より西の地域を下総国から武蔵国へ編入されました。

### 第四番、諸宗山並縁寺回向院、浄土宗

札所本尊 馬頭観世音菩薩 本尊 阿弥陀如来  
ご詠歌 み仏の慈悲の光に 照らされて

ご真言 万人塚に 詣でてくる人

おん あみりと どはんばうん はった そわか  
振袖火事(ふりそでかじ)と呼ばれる明暦の大火、明



暦三年(1657)の焼死者十万人八千人を幕命(当時の將軍は徳川家綱)によって葬った万人塚が始まりです。

後に安政大地震をはじめ、水死者や焼死者、刑死者など横死者(おうししや)の無縁仏も埋葬していた。

あらゆる宗派だけでなく、人や動物すべての生あるものを供養するという理念から、軍用犬や軍馬慰霊碑や「猫塚」「唐犬之塚」「オットセイ供養塔」「犬猫供養塔」「小鳥供養塔」、邦楽器商組合の「犬猫供養塔、三味線の革の供養」等、さまざまな動物の慰霊碑、供養碑、ペットの墓が多数あります。

更に、江戸三十三箇所所観音参りの第四番札所である「馬頭観世音菩薩」も徳川家綱の愛馬を供養したことに由来しています。

寛政五年(1793)、老中松平定信の命によって造立された「水子塚」は、水子供養の発祥とされている。

2月第一土曜日14時から水子塚の前にて水子総供養を、その他は隔月毎に本堂にて水子供養を行っています。

著名人の墓として、山東京伝、竹本義太夫、鼠小僧次郎吉などがあります。

天明元年(1811)以降には、境内で勸進相撲が興行された。これが今日の大相撲の起源となり、明治42年(1909)旧両国国技館が建てられるに至りました。

国技館建設までの時代の相撲を指して「回向院相撲」と呼ぶこともありましたが。

昭和11年1月には大日本相撲協会が物故力士や年寄の霊を祀る「力塚」を建立しています。

※回向、法要の功德にて死者の霊を平穏にすること他。

## 鼠小僧の墓

境内の奥の方に「鼠小僧次郎吉」の墓があります。

鼠小僧次郎吉は、江戸時代に大名屋敷を専門に狙った窃盗犯ですが「貧困者に、汚職大名や悪徳商家から盗んだ金銭を分け与える」という義賊伝説があります。しかし、盗んだ金銭の使途に付いては、博打や女、酒に浪費したというのが有力な説です。

武士階級が絶対であった江戸時代に大名屋敷を専門に窃盗を行ったことから、反権力の具現者のように扱われたのでしょう。

墓標の前に小さな墓石のようなものが立っていて、参拝者はこの石を削り取っていく人が多く。

これは「鼠小僧の墓石を持っていると勝負に勝てる」という俗信から始まった風習で、現在でも祈願に訪れ、削り取っていく人は絶えません。

小金原回向院処刑場にも鼠小僧の墓があります。

## 吉良上野介邸跡

約98.2㎡29.5坪の敷地に、屋敷神である稲荷明神と義央供養を兼ねた神社や井戸、桜の木などがある程度で、記念広場の様相ですが松坂公園という。

吉良義央の屋敷は、鍛冶橋の屋敷を拝領していたが、松の廊下の刃傷事件の約五カ月後の元禄14年8月に、鍛冶橋屋敷は幕府に御用地として召し上げとなりました。よって翌月9月松平登之助の屋敷を拝領し幕府により移り住んだ。

元禄時代の当時は付近一帯が吉良義央の邸宅であり、その広さは約8400㎡2550坪と、その広さをうかがうことができる。邸宅は、赤穂浪士による討ち入りの後の、元禄16年2月4日には江戸幕府に没収

され、一部が中島氏と佐伯氏の拝領屋敷となった。

昭和9年、地元有志らが旧邸内の住宅地を購入し、東京市に寄贈し、翌昭和10年に公園として開かれ、さらに昭和25年に墨田区へ移管されました。

鬼平の子分 大滝の五郎蔵の住居、六尺の大男。

堅川二之橋袂の小林一茶飯寓跡、(かぐうあと) (未)

安永6年(1777)春、一茶15歳の時に江戸に奉公に出て以降、俳諧修行の旅で関西各地や四国に居たがそれ以外は江戸住まいを続けていました。

享和3年(1813)以降、一茶が江戸のどこに住んでいたかは、或る程度判明している。同年、一茶は本所五ツ目大島愛宕山(江東区大島)に住んでいました。

真言宗愛宕山勝智院のことです、住職が葛飾派の俳人であった関係で、一茶は勝智院に間借りしていたと考えられています。

なお、その後勝智院は千葉県佐倉市に移っており、勝智院の跡は大島稲荷神社となっています。

しかし愛宕山での生活は長くは続かなかった。文化元年(1804)4月、葛飾派の俳人であった住職が亡くなり、後任の住職の下で一茶は間借りを続けることは出来なくなり、両国の近くの本所相生町5丁目の堅川二之橋袂に引越しました。

この相生町の家は間借りではなく、小さいながらも一軒家であり、庭には梅や竹が植えられていて、垣根には季節になると朝顔が育つ飯寓でした。

家財道具一式を親交深い流山の秋元双樹(そうじゆ)がプレゼントしてくれており、これまでよりも暮

しに落ち着きが出来た一茶のもとには、俳人の来訪



者が増えました。

この家は、一茶が遺産相続問題に本腰になって取り組んだ文化5年(1808)に、二百日以上という長期間、留守にしていたために他人に貸し出されてしまいうまでの約4年間、生活していました。

この頃、一茶が詠んだ俳句の中には江戸の下町暮らしを髣髴(ほうふつ)とさせるものがあります。

文化元年作、梅の季節、誰が訪ねて来ても欠けた茶碗でもてなすしかない、貧乏で孤独なわび住まいを詠んでいます。

梅が香や どなたが来ても 欠茶碗、

文化三年作、今年もまた役立たずの邪魔者なのだと、己と草ぼうぼうの自らの家を自嘲した

又ことし 娑婆塞(しゃばふさぎ)ぞよ 草の家

文化時代前半期、父の死による精神面、生活面での変化に加え、江戸下町での暮らし、そして一茶が所属していた葛飾派の枠を超えた有能な俳人たちの交流などによって、一茶の俳句は磨かれました。

この時期は一茶独自の俳風である「一茶調」がはつきりとし始める時期であると評価されています。

また、夜鷹との話も、女好きの一茶と両国橋という土地での出来事であったようです。

葛飾北斎住居跡と榛馬場跡

すみだ北斎美術館、北斎通り旧南割下水通り沿い、榛馬場跡(はんのきばあと)

この辺りには、榛馬場と呼ばれた馬場がありました。本所に住む武士の弓馬の稽古のために設けられ、周りを囲む土手にカバノキ科の落葉高木大きな榛が

あったところから、そう呼ばれたようです。

勝海舟の父小吉の著書「夢酔独言」で、子どものころの回想として、榛馬場のことが出ています。馬場の傍らに祀られていたのが「榛稻荷神社」です。

天保八年(1837)に亀沢町の若者が奉納した木造朱塗の奉紙立が、震災、戦災を逃れて今でも保存されています。葛飾北斎も娘のお栄とともに稻荷神社脇に住んでいたことがあります。

葛飾北斎住居跡 (未)

所在地 墨田区両国四丁目三十四番付近

本所に生まれた絵師葛飾北斎は、この稻荷神社のすぐ近くに住んでいたことがありました。北斎は九十歳で没するまで常に新しい技法を試み、「富嶽三十六景」に代表される錦絵だけではなく、肉筆画も手がけ、数多くの作品を生み出しました。

榛馬場の辺りに住んでいた当時の様子を伝えるのが、「北斎仮宅写生」露木為一筆です。

絵を描く老いた北斎と三女の応為(おーい)が描かれています。応為は父北斎に、いつも「お栄」と呼ばれていましたが、応為も優れた絵師でした。

特に浮世絵に無かった、陰影法が使われ、描かれている作品には驚きます。春画も多く残している。

その暮らしぶりを飯島虚心は「蜜柑箱を少しく高く釘づけになして、中には、日蓮の像を安置せり。火鉢の傍には、佐倉炭の俵、土産物桜餅の籠、鮎の竹の皮など、取ちらし、物置と掃溜(はきだめ)と、一様なるが如し」葛飾北斎伝と記しています。

北斎がこの地に暮らしたのは天保末年頃(1840)で、信州小布施から帰宅後で80歳を越えていたと思

われますが、絵を描くこと以外は気にも留めないような暮らしぶりが見てとれます。

北斎は生涯で九十回以上も転居を繰り返したとされていますが、居所のすべてが正確に分かっているわけではありません。榛馬場の北斎住居跡は、ある程度場所の特定ができ、絵画資料も伴うものとして貴重な例です。また、幕末明治期に活躍した政治家勝海舟もこの近くで生まれ育ちました。

山岡鉄舟旧居跡 (未)

江戸末期の幕臣で剣術家、維新後に無刀流の創始者ともになり、侍従も勤めた山岡鉄舟の生家小野家がこの中学校の正門の辺りにありました。

鉄舟は天保7年(1836)、御蔵奉行だった旗本小野朝右衛門高福の五男として、鉄太郎と名付けられた。

安政4年頃(1851)、槍術で知られる旗本山岡静山の妹婿となり山岡高歩(たかゆき)、号は鉄舟を名乗った。鉄舟の義兄にあたる槍の名手精一郎は、旗本高橋家に入婿し、後に泥舟と号するようになる。

勝海舟も含めてこの3人は「幕末の三舟」として知られている。慶應4年(1858)、江戸城総攻撃に先立ち鉄舟は西郷隆盛と接触し、勝海舟と協力して江戸城無血開城への道を開いた。

明治維新後、静岡県や茨城県などで参事や県令となり、明治4年(1871)より明治天皇の侍従として厚い信頼を得たが、明治21年(1888)53歳で死去し、台東区谷中の全生庵に葬られています。

落語家三遊亭圓朝居居跡地

天保10年4月(1839)〜明治33年(1900)8月  
怪談噺「真景累ヶ淵」(常総市)は有名です。



## 大横川

江戸時代の埋立地に造られた運河で、堅川と現隅田川の太川間の十万坪と呼ばれる葦原を流れていた。明治時代以降、東京湾に來航する貨物船の荷物を移し替えた舁(はしけ)が行き交い賑わいを見せたが、第二次世界大戦中、戦後には浚渫(しゅんせつ)が放棄されて河床が上昇。船は、満潮時にのみ行き交うことが可能な状態となった。

加えて1951年の頃には、地盤沈下のため橋桁が相対的に下がるようになり、沢海橋では船がぐぐりにくい状態となっていた。

その後、堅川の交差点から北十間川まで延長されたが、周囲が地下水汲み上げによる地盤沈下のためゼロメートル地帯となったため、堰き止められて常時排水することにより水位を下げ、親水公園として整備されて現在に至ります。

渇水した大横川を上流へと歩くことで、公園内をスカイツリーを正面に景色を堪能できます。

## 法恩寺通り紅葉橋

紅葉橋の横川1丁目側に桜屋敷がありました。

鬼平犯科帳第二話「出村の櫻屋敷」田坂家の娘おふくが船で嫁入り、それを見送る平蔵はおふくに惚れていた。池波正太郎、中村吉右衛門、萬田久子

## 平河山本住院法恩寺(ほうおんじ)、日蓮宗

本尊は十界曼荼羅。旧本山は大本山本圀寺

太田道灌が長祿二年(1458)に江戸城を築くにあたり、城内鎮護の祈願所として武蔵国平河村、江戸城平川口に建立開基。開山は本住院日住上人で、当初は本住院と称しました。

道灌の跡を継ぎ城主となった嫡子法恩齋の年忌に際し、孫の太田資高が寺号を法恩寺と改めました。

その後神田柳原、谷中清水町と移転した後、元祿8年(1695)に現在地に移ったが、当時は塔頭二十カ寺、末寺十一カ寺を擁していました。

現在も日蓮宗小西法縁内の法脈の一字である法恩寺法脈の脈頭寺院として大きな影響力を持つ。

また、隅田川川施餓鬼(せがき)、七草粥、震災記念「思い出のすいとん会」、十五夜お茶会、年末餅つき会、花見の縁などの開催など、壇信徒のみならず地域社会や地元近隣町会との繋がりが大変に強い寺として知られています。

現在地の「太平町」の地名は、太田道灌の「太」の字と、山号平河山の「平」の二文字をとり命名されたものと云われています。

春日通り横川橋の右岸には「本所七不思議」がある。本所に江戸時代の頃から伝承される奇談、怪談。

江戸時代の典型的な都市伝説の一つであり、古くから落語など噺のネタとして庶民の好奇心をくすぐり親しまれてきました。

「七不思議」といわれる伝説の一種ですが、伝承によって登場する物語が一部異なっていることから八つ以上のエピソードが存在しています。

江戸の七不思議には、本所以外に千住、馬喰町、深川、番町、麻布などにもあります。

## 本所七不思議九話を紹介

一、置行堀、おいてけぼり 北斎通り津軽神社

本所付近は水路が多く、魚がよく釣れた。ある日

仲の良い町人たちが錦糸町あたりの堀で釣り糸を垂れたところ、非常によく釣れた。夕暮れになり気を良くして帰ろうとすると、堀の中から「置いていけ」という恐ろしい声があったので、恐怖に駆られて逃げ帰った。家に着いて恐る恐る魚籠を覗くと、あれほど釣れた魚が一匹も入っていなかった。

## 二、送り提灯、おくりちようちん 法恩寺

提灯を持たずに夜道を歩く者の前に、提灯のように揺れる明かりが、あたかも人を送って行くように現れ、あの明かりを目当てに行けば夜道も迷わないうと思つて近づくと、不意に明かりが消え、やがて明かりがつくので近づくとまた消え、これの繰り返しでいつまで経っても追いつけない。

## 三、送り拍子木、おくりひょうしぎ 江北橋脇

江戸時代の割下水付近を、「火の用心」と唱えながら拍子木を打って夜回りすると、打ち終えたはずの拍子木の音が同じような調子で繰り返して聞こえ、あたかも自分を送っているようだが、背後を振り向いても誰もいないというお話です。

実際には、静まり返った町中に拍子木の音が反響したに過ぎないとの指摘もあります。

雨の日、拍子木を打っていないのに拍子木の音が聞こえたという話もある。

## 四、燈無蕎麦、あかりなしそば、別名「消えずの行灯」

夜になると二八蕎麦の屋台が出たが、そのうちの1軒はいっ行っても店の主人がおらず、夜明けまで待っても遂に現れず、その間、店先に出している行灯の火が常に消えているというもの。

この行灯にうかつに火をつけると、家へ帰ってか



ら必ず不幸が起るといふ。やがて、この店に立ち寄っただけでも不幸に見舞われてしまうという噂すら立つようになりました。

逆に「消えずの行灯」といって、誰も給油していかないのに行灯の油が一向に尽きず、一晚たつても燃え続けているという伝承もあり、この店に立ち寄ると不幸に見舞われてしまうともいわれた。

正体はタヌキの仕業ともいわれており、歌川国輝による浮世絵『本所七不思議之内 無灯蕎麦』にはこの説に基づき、燈無蕎麦の店先にタヌキが描かれている。

黙阿弥終焉の地

##### 五、足洗邸、あしあらいやしき 長崎橋跡

本所三笠町に所在した味野岬之助という旗本の上屋敷での事。屋敷では毎晩、天井裏からの凄い音がした挙げ句、「足を洗え」という声が響き、同時に天井をバリバリと突き破って剛毛に覆われた巨大な足が降りてくる。

家人が言われたとおりに洗ってやると天井裏に消えていくが、それは毎晩繰り返され、洗わないでいると足の主は怒って家中の天井を踏み抜いて暴れる。

あまりの怪奇現象にたまりかねた味野が同僚の旗本にことを話すと、同僚は大変興味を持ち、上意の許を得て上屋敷を交換した。ところが同僚が移り住んだところ、足は二度と現れなかったという。

なお怪談中にある大足の怪物の台詞が「あらえ、怪談の名称が「あらい」であるのは、江戸言葉特有の「え」「い」の混同によるものと指摘されている。

##### 六、片葉の葦、かたはのあし 両国橋袂

お駒という美しい娘が住んでいたが、近所に住む

留蔵という男が恋心を抱き幾度も迫ったものの、お駒は一向になびかず、遂に爆発した留蔵は、所用で外出したお駒を追った。

そして隅田川からの入り堀にかかる駒止橋付近でお駒を襲い、片手片足を切り落とし殺した挙げ句に堀に投げ込んでしまった。それ以降、駒止橋付近の堀の周囲に生い茂る葦は、何故か片方だけの葉しか付けなくなったという。

##### 七、落葉なき椎、おちばなきしい 旧安田庭園

本所に所在した平戸新田藩松浦家の上屋敷には見事な椎の銘木があったが、なぜかこの木は一枚も葉を落としたことがない。松浦家も次第に気味が悪くなり、屋敷を使わなくなってしまった。

##### 八、狸囃子、たぬきばやし、別名「馬鹿囃子」

本所では馬鹿囃子(ばかばやし)とも言い、本所を舞台とした本所七不思議と呼ばれる奇談怪談の一つに数えられている。

囃子の音がどこから聞こえてくるのかと思つて音の方向へ散策に出ても、音は逃げるように遠ざかっていき、音の主は絶対に分からない。

音を追っているうちに夜が明けると、見たこともない場所にいることに気付くという。

平戸藩主松浦清もこの怪異に遭い、人に命じて音の所在を捜させたが、割下水付近で音は消え、所在を捜すことはできなかったという。

その名の通りタヌキの仕業ともいわれ、音の聞こえたあたりでタヌキの捜索が行われたこともあったが、タヌキのいた形跡は発見できなかったという。

千葉県木更津市の證誠寺にも狸囃子の伝説があり、

群馬県館林市の茂林寺の『分福茶釜』伊予国の『松山騒動八百八狸物語』と並んで「日本三大狸伝説」の1つに数えられ、童謡「証誠寺の狸囃子」の題材となったことで知られています。本所中学

##### 九、津軽の太鼓、つがるのたいこ 長崎橋跡

弘前藩津軽越中守の屋敷には火の見櫓があった。しかし通常火の見櫓で火災を知らせるときは板木を鳴らすのだが、なぜかこの屋敷の櫓には板木の代わりに太鼓がぶら下がっており、火事の際には太鼓を鳴らした。なぜこの屋敷の櫓だけが太鼓だったのかは誰も知らない。

他には越中守屋敷の火の見櫓の板木を鳴らすと太鼓の音がするという物語も存在する。

ちなみに弘前藩主家分家である黒石津軽家当主の津軽著高と弘前藩主家相続前に黒石津軽家当主であった津軽寧親(やすちか)が本所深川火事場見廻役を勤めていた。なにか因果関係があるのかな。

##### 大横川業平橋と更に古い小梅橋

かつての南蔵院業平社の境内にあった業平塚に由来します。この塚の名前は伊勢物語で有名な平安時代の歌人在原業平がこの地を訪れ、歌を詠んだことを起源としています。橋としての業平の名前は古く、寛文2年(1662)、業平神社の東側を流れる大横川に業平橋が架けられました。

小梅橋は十間川に架かっているが江戸百景では、曳舟川の堤の古橋でした。現在は曳舟川通り。

##### 東京スカイツリー駅、元業平橋駅前解散します。

相馬霊場を巡る会、江戸観音巡り